

テーマ 変容の形と方向 - 基礎・構造・形態 -

テーマ では「会計ビッグバン」にともなう新しい会計基準と「企業会計原則」の基本的な考え方との整合性の問題、そしてテーマ では新旧の会計基準からなる今日の企業会計の全体をどう見るか、についてみてきました。

テーマ では、企業会計の今日の変容がどのような構造をもっているか、さらにその変容がいかなる方向(ベクトル)を向いているか、それぞれその基礎から明らかにしてみたいと思います。

以下、3回にわたってお話しします。1つは変容の構造と方向のモデルを示してみます(第7回と第8回)そしてもう1つは、それをいくつかの具体ケースでみることで、そのモデルを検証します(第9回)。

第7回 計算枠組みの今日の変容

計算枠組みは1つ?

Q: まず、今回の議論の基本視点を。

A: 今日の企業会計は、テーマ でみたように従来の計算枠組みでは説明がつきそうもない会計ルールが登場してきているように私には思えます。第6回で述べました伝統的な「配分計算」(フロー配分)の枠組みだけでなく、それとは性格を異にする今日的な「価値評価」(ストック評価)の枠組みが今日の企業会計にみられます。

したがって、ここではテーマ で述べた「区分の論理」の視点から、相異なる2つの枠組みが全体として併存しているという見方に立って議論してみたいと思います。むろん、先にみたように、別の視点から全体を説明する見方もあるわけですが、いずれが「全体」を無理なく説明しているか、これが決め手になるでしょう。

そこで、より積極的に、この2つの計算枠組みの対照的な特徴点を示すことで、「拡張の論理」はむろん、「補完の論理」でも全体を説明しがたいのではないかと、という点を明らかにしてみたいと思います。

Q: わかりました。では、さっそくその特徴比較を。

A: 図表3.1を見てください。2つの計算枠組みの特徴比較を示したものです。そこでは、この他にも考えられますが、特に から の7つの対立軸で比較しています。

図表 3.1 2つの計算枠組みの特徴比較

特徴軸 計算枠組	ストック/フロー の関係	計算の基点	会計枠組み の思考	将来収支 の確定性	資産・負債 の評価	簿価決定 のあり方	利益決定 のあり方
系	フロー志向 (フロー ストック)	当初認識時	配分 (配分の修正)	確定的 (固定的)	原価・ 償却原価	連続・ フロー配分型	フローの 配分計算
系	ストック志向 (ストック フロー)	特定時点	価値評価 (直接的再測定)	不確定 (変動的)	時価 (公正価値)	非連続(離散)・ ストック評価型	ストックの 価値評価差額

詳しくはこれから述べますが、なかでも 計算基点の相違（当初認識時 vs. 特定時点）は重要ですので注意してください。というのは、この相違は、 会計枠組みの思考の相違や 資産・負債の測定のあり方の相違、あるいは 簿価決定のあり方の相違と密接につながっているからです。

いずれにせよ、この比較で、「基本」のいわば“基本性”がどこに求められるかをつかんでもらえばと思います。

当初認識時か特定時点か

Q：では、 計算の基点の相違（当初認識時 vs. 特定時点）についてご説明下さい。

A：はい。今日の時価会計における会計測定の重要な特徴は、端的にいえば、特定時点の情報や仮定に基づく再測定という点に見出されます。特定時点でリセットされますから、そこでの測定は当初認識時から分離切断されています。これがポイントです。したがって、重要な点は資産評価における原価か時価かよりも、より基本的には計算の基点が当初認識時にあるか、それともそこから分離切断されているか、この相違にあると言えます。

Q：何か具体例でご説明できますか。

A：例えば、仮に減価償却が特定時点間の現在価値の差額として計算されるなら（経済的減価償却）それは系 に属する、現行とはまったく性質の異なる減価償却と言えるでしょう。減価償却が会計配分の象徴的存在であるだけに、それがこうした配分計算ではなく価値評価の差額として計算されるなら、系 が企業会計の全局面に浸透するということになるでしょう。詳しくは、第9回での具体ケースで議論します。

もう1つあげれば、割引現在価値計算です。その分母側、すなわち割引利率が当初のままか（固定的） それとも各測定時点で異なるか（変動的）、という相違になります。時価会計での測定がその時点で現在の価値をあらわすかぎり、当初の割引率ではなく特定時点での財務リスクないし財務実態を反映する割引率が用いられるからです。

Q：従来つまり系 でも、割引現在価値計算による会計処理はありますね。

A：そうです。会計配分の計算においても、たとえば「利息法」により償却原価法にみられるように、割引現在価値の計算はできてきますね。ただ重要なのは、分子側の将来キャッシュ・フローの見積修正はあっても（例えば減損会計）、分母側の割引率は依然として固定されるという点です。それは、あくまで会計配分の修正という位置づけにとどまると言えます。

その点で、分母側の割引利率の扱い、すなわち当初の利率のままか、測定時点で変わりうるか、これが時価測定であるかどうかの1つの重要なベンチマークになると言えます。

Q：なるほど、割引現在価値計算の分母側にその相違があらわれるということですね。では、将来収支の確定性についてはいかがですか？

A：将来キャッシュフローが何らかのかたちで確定しているか、それとも不確定か（確率変数）、この相違も重要ですね。何らかのかたちで確定しているからこそ、事前の配分ルールによる会計配分がなされるわけで、不確実なキャッシュ・フローを事前に特定の配分ルールでもって配分することはできないわけです。

仮にそれも「配分」というのであれば、それは“結果的配分”にすぎませんね。この点は、第9回の実例ケースで別個説明しています。そこでの満期保有目的債券と売買目的有価証券の比較をみていただければ理解できるかと思います。

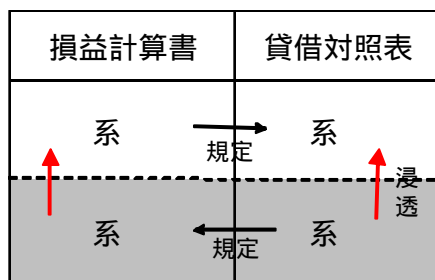
異なる枠組みの併存と交錯

Q：2つの枠組みの併存となれば、財務諸表にもその構造があらわれますね。

A：当然そうなります。2つの枠組みは損益計算書と貸借対照表との関係からして、いずれの財務諸表にもその併存と交錯の構造が何らかのかたちで現れます。

図表 3.2 はその併存と交錯の構造（ハイブリッド構造）を表したものです。今日の企業会計のハイブリッドな形を概念的に示しています。

図表 3.2 ハイブリッド構造の概念図



Q：図の矢印についてご説明願いますか。

A：はい。ヨコの矢印は、P/LとB/Sとの規定関係を表しています。すなわち、系では期間損益を決定すること（フローの配分計算）が資産・負債を決定すること（ストックの評価）を表しています。この点は前回に議論したとおりです。これに対し、系では逆の規定になっています。つまり、そのストックとフローの基本関係において、系と系とは互いに逆になっていることに注意してください。この点は、例えば第3回での退職給付会計での議論を思い出してください。

また、タテの矢印は、系が系の領域に次第に“浸透”してきている今日の企業会計

の1つのあり方を示しています。破線はその境界を示していますが、現実には両者が交錯する領域として現れています。

Q：確かに、第1回目でもお話しがありましたが、繰延資産など配分思考からでてくる資産・負債の地位が今日の時価会計の台頭で危なくなっていますね。ところで、交錯とは？

A：ある1つの会計処理に系と系の考え方とがでてきている現実です。実は、この交錯しているところの検討が、将来の企業会計のあり方を展望する上で重要といえます。したがって、何がそうした交錯領域に位置している会計基準であり、いかなる内容でもって交錯しているか、この点が理論的に興味深い対象となります。

そうした個々の会計基準の具体的検討は第9回で行います。ここでは、全体としての構造に焦点が当てられています。

Q：ちなみに、金融商品会計に全面時価が適用されとしたらどうですか？

A：第9回で取り上げていますが、もし金融商品に全面時価アプローチが採られるようになれば、たとえば満期保有目的債券も現行の償却原価ではなく売買目的有価証券と同じく時価で測定され、その時価評価差額が損益となります。つまり、系から系の枠に入ることになりますね。

会計思考のハイブリッド

以上のことは、さらにその基底にある会計観の変遷と交錯という観点からもとらえることができます。

Q：会計観の変遷がその基底にあるということですか？

A：そうです。今日の企業会計には、かつての「評価」（財産計算：ストック中心観）から「配分」（利益計算：フロー中心観）への転換から、さらに一転してその「配分」からあらたな「評価」（企業価値評価：あらたなストック中心観）へと、ストックかフローかという観点からすれば、ある種の“逆転換”の現象が起きているようにみえます。

Q：とはともに「評価」となっていますが、その相違は？

A：“逆転換”と言っても、けっして静態論思考（財産計算を中心にする思考）に“先祖返り”しているわけではありません。したがって、そこでの「評価」の思考と同じではありません。ストックの価値評価といっても、それが出てくる背景もその内容も、そして対象も異なるわけです。

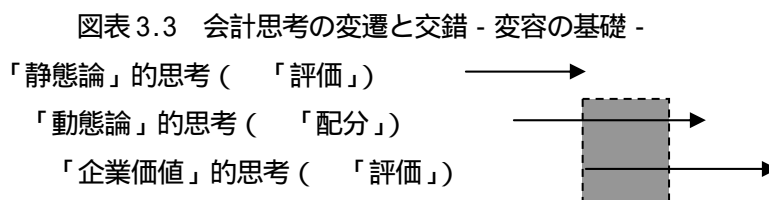
この「配分」から「評価」への転換を会計思考の変遷からみれば、今日の企業会計にはこれまでの動態論思考（利益計算を中心にする思考）とはまた性質を異にする会計思考が横たわっているように思えます。それは端的に言えば、企業価値（株主価値）を志向する会計と言えます。

Q：テーマでは「企業会計原則」の基本的な考え方について議論しましたね。端的には、その基底に動態論思考があると。しかし、今日、もし動態論思考とは異なる会計思考が出てきているなら、この点でも「企業会計原則」の延長上で今日の会計ビッグバンを捉

えることは難しい、ということになりませんか。

A：会計観まで掘り下げて議論するのは、まさにそういうことを考えるからです。今日の企業会計は動態論的会計観からさらに企業価値的会計観へと移行しているようにみえますが、それが完全にとってかわる会計観になるのかどうかは、会計観の変遷という点から重要な点であるといえます。

実は、先に述べた計算枠組みの系（配分計算型）と系（価値評価型）の併存の基底にはこうした動態論的思考と企業価値的思考とが併存・交錯しており、今日のハイブリッドな企業会計のあり方も、こうした“会計思考のハイブリッド”に根ざしているといえますね（図表3.3の破線枠参照）。



（以上、06年8月）